

インディーズ・ムービーの作り方

テロペット

TERROPET
の場合



宇宙からきたかわいいこぐま
ペットだけとテロリスト

アイエムオー作品
脚本/クマガイコウキ

0監督インタビュー0

0ペットにしてテロリストの宇宙難民が主役！—しかもミュージック(?)デスクトップシネマという新しいジャンルに挑む監督にお話をうかがいました。



出演者

- (左より)
 - ・クマガイコウキ氏/監督、一部出演。
 - ・安達美由紀/真木子役。モデルとしてCM等に出演するほか、舞台にも多数出演。前作「要塞家族」にも出演しています。
 - ・金野治章/市二郎役。もと「メナド企画」所属。個性的な存在感で注目されている。某番組で、海外放送の様子が生放送されたので、知っている方も多はず。
 - ・ピッチ/本編ではCGですが、役者さんの目録や、演出のために人形が作られました。(造形工藤氏IS-UP制作)

— デスクトップシネマ第2作目という事なんですが、制作に至った経緯を教えてください。

クマ パソコンを使ってですね、パソコンで作ってパソコンで観る。今までやって来た事とパソコンが結びついた、リンクした。それだけの事です。

— それはIM0(いがらしみきお事務所)として、もう何年も前から、いがらし先生とそういう話はあったわけですか？

クマ うん、映画はもちろん「大感傷飯面」をIM0で作ったり、「ぼのぼの」のアニメーションで原作者・監督としてついたり、そんな感じで(劇場映画作りに)2回位関わった中で分かったのは、これ以上規模が大きくなるぶんには、どこまでも大きくなるだろう。「35mmです、70mmです、35mm100人です、予算がこんなにかかります」という風に1ヶ月・2ヶ月と変わって行って、「あれはできない、これもできない」なんて言っただけでいいという図式が見えてきて、8mm映画を作っていた頃から面白くなったんだよ。

例えば8mm映画の自主上映会に行くと「あれをやりたいんだけど私にはできない。だからこれをやるんだ」という話をされた事があったんだけど、そんな対抗な方向で作られた映画は観たくないし、自分自身も作りたくない。

むしろ「これはできる、これもできる」という風になっていかないと、中身も、現場の方法論としても、面白いもの・納得できるものはできないんじゃないかと思ってたんだ。

その流れで今回は「金はない、人手もない、日数もかけられない」という時に「ここにパソコンがある。これを最大に活用すれば、「これもできる、あれもできる」だろう」というところからスタートしているわけなんだよね。

8mm撮った時と変わってないと思うんだよね。自分一人メインのスタッフとして作った時「これは個人映画だ。個人映画だからこういう事もできる。」みたいに、自分なりの正しい道筋をさがして、そうして作ってきたわけで、今回の「テロペット」も、映画としてはそういうことになるのかな。

⇒デスクトップシネマ

・ビデオによる手軽な撮影とパソコン上での簡単な加工で映像制作の手間を軽減し、映画が手軽に作れるようにならないか—そんな意味も含めて提唱されている新ジャンル。作品はCD-ROMで発表され、パソコン上でそれを観ることになる。もともと1秒間に12フレーム(8mm7.64mmでも187フレーム)と画質が荒いために、逆に撮影に高度な技術が必要ないという大きな利点がある。

⇒IM0

・「ぼのぼの」「忍ペンまん丸」等々有名で有名な仙台在住の漫画家、いがらしみきお先生のオフィス。いがらし先生は、93年に映画化された「ぼのぼの」で脚本・監督を務めるなど、映像制作に対して積極的で、クマガイ氏の作品(「大感傷飯面」等)をプロデュースなさっています。



— クマガイさんの場合、ハード面でもソフト面でも新しい事をしようというのはいつも作品から感じられるのですが、自分(97年 高橋)や、岸波君(97年)の作品なんかの場合が、かつての(自分の観た)映画のやきなおし的な部分がありますけど、クマガイさんの「こういうのもやってみようよ」という新しさがあるんじゃないかと。

クマ でも今回の「デスクトップシネマ」に関しては、自分一人の方針じゃないし、IM0として作るわけだから。そういう意味では自分なんかよりも、いがらし先生の方が「人がやったことはやりたくない」という部分が強くなる。だからその影響も多分にあるし。いがらし先生は、やる前から「こうなるんだろう」という事は絶対やらないからね。興味ないからね、ありものには、肯定している。激賞激賞。

— 「クマ屋宇宙人テロリスト・ピッチ」というキャラクターが出てきますが、「テロ」にこだわったわけではないですね。

クマ ……いや、やっぱり「ヤンヤムムク」

— ?

クマ NHK教育テレビ系…中身の事?

— そうです。

クマ カワイくてワイルドである。

— ?

クマ SO QUTE, SO WILD.

— ?

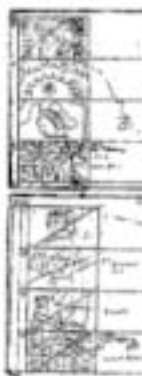
クマ 平たくいうと今回、安達さんにやってもらった役(真紀子)は「まじめに生きてる。」…今の世の中にはいろんな

カテゴリー(価値観とか、仲間とか、そういう仲間)が、いっぱいあって、何かこっちのカテゴリーがイヤだっていうと別のに入って、それがイヤになったら、また別のに入るみたいな、世の中になってきてる。

まともに生きている人間は、いろんなカテゴリーには属していかないのに、それを追われている。

そんな閉塞状況に追い込まれた彼女(真紀子)に、最後に残されたものは、「テロペット」であるところの「ピッチ」であった。(つづく)

☆この後も興味深いお話を続けますが、話題がちよっとコアすぎるため、また別の機会に何らかの形で伝えたいと思っております。



↑絵コンテ

イワナの夏



・小学校の廊下を横に幼なじみのカップルが自転車を停めて通学路を戻ってみようとする。0-15分「イワナの夏(仮)」。

当初は8月上旬にクラクインの予定だったが、キャストに難航に加え、冷夏というアクシデントにも見舞われて、現在制作が遅れ気味になっている。

「流れに逆わず、冷夏も逆手にとるつもりでがんばっていきなさい」と監督の弁。

撮影は仙台市郊外の田園を中心に行われる。公開は98年末。(監督:斎藤新生)



・77年発表のクラシックSF少女漫画を、舞台を現代に移して映像化する予定。

クラクインを秋に控えて、現在シナリオの詰めとキャスト選定作業を行っているところだ。

「タイムパトロール」「ラブストーリー」—もう手垢がついているといってもいいような素材を、照れずに、こじんまりと、作れたらいいと思っています。

8mmフィルムを使用して、自分が小さな頃夢中になって観ていた外国のTVドラマを目指すつもりです。(監督:北村誠)

月光探偵団



・昆虫映画の映像作家・前野義一氏が、92年から7年間に連載していた小説の「月光探偵団」を、自らの手で映画化。現在制作中の模様です。

人形作家でもあり、様々な映像作品を発表している前野氏の新作とあって、各方面から期待の声が上がっています。

タイトルは「月光探偵団・映画版第1話/甲殻爬虫類」。

人形アニメーション作品のよう。舞台の撮影や役者など、精力的な活動を展開する氏の今後の活動に注目です。

0要塞家族0

・昨年完成したデスクトップ・シネマ第1弾。あらゆるものに一步も引かず、真正面から向き合う家族が、それこそ、本当に家ごと不条理に立ち向かってゆくという映画。

出演に 米沢 牛、松崎太郎、安達美由紀と、仙台屈指の舞台俳優陣をむかえ、見応えたっぷりの作品。



・取材/写真撮影:遠藤昌幸

0撮影0

撮影/小野寺修
撮影協力/倉見純、斎藤新生、岸波清史

・今回の撮影は業務用のビデオカメラで行われ、後にデジタル化され、パソコン上で編集される予定です。

撮影期間は8月15日~17日の3日間、青年文化センターB1Fのビデオスタジオで行われました。

時間短縮のため、シナリオを全て絵コンテに書きおこし、役者とカメラの位置関係から撮影できるシーンを片っ端から消化してゆくという方法がとられました。

また、役者をすべてブルーバックで撮影した後に背景を後からCGで制作・合成をするというやりかたで、爆発や地殻変動といったスペクタクルシーンだけでなく、背景の移動(と、撮影場所の移動)を単純化しました。



0白黒なので写真では分かりにくいかも知れませんが、ブルーバックで撮影されています。(左)。
0役者さんの目録や、CG合成の目安として、人形が使用されました。(上・右)



0CG制作で撮影した役者さん
0ブルーバックで撮影しながら撮影。

0撮れるだけから撮影するので、絵コンテのチェックが大変なものでした。

0テロペット/ストーリー0

・証券会社に勤務する真面目なOL・真木子。会社のために簿外経費を捻出したり、重油除去のボランティア活動に参加したりと、現代社会の問題の中で誠実に生きようと努力してきた彼女だった。

だが、会社もボランティアも、彼女の誠実を乗り越えて彼女に干渉しはじめる。

言いようのない不快感を感じる真木子の前に、60年前に地球へ移住してきたクマ形宇宙人・ニニ族の一人ピッチがあらわれる。

ピッチは食用にされたり、ペットにされたりと迫害を受けるニニ族を解放するために戦う、〈ニニ解放軍〉の戦士だった。

ピッチの戦いに巻き込まれているうちに真木子はあることを決意する。それは—

☆ここには掲載できませんでしたが、監督のお話の中の「善悪の強制力に対して『NO』と言える機軸がない。なぜなら、それが『善悪』だから。最後の機軸は『善悪』だと思うわけです。」—という部分が、この作品の強みかもしれません。